

## 千辛万苦の場

— 若彦屋に潜伏した井上聞多 —

入 江 秀 利

尋常小学校の時、国語の教科書で「母の力」を習いました。未だに心に残っているのは、次の条りです。

「…「介錯頼む。」

兄は、涙ながらにうなづいた。どうせ助からない弟、頼みに任せてひとしい死なせてやるのが、せめてもの慈悲だ。決然として、兄は刀を抜いた。

「待っておくれ。」

それは、しほるような母の声である。母の手は、堅く五郎三郎の袖にすがっていた。

「待っておくれ。お医者もここにいられる。たとえ治療のかいはないにしても、できるだけの手を尽さないでは、この母の心がすみませぬ。」

「母上、こうなつては是非もございませぬ。聞多のからだには、もう一滴の血も残っていませんぞ。手当てをし

ても、ただ苦しめるばかり。さあ、おはなしください。」

兄は、刀を振り上げた。

その時早く、母親は、血だらけの聞多のからだをひしとだきしめた。

「さあ、切るなら、この母もろとも切っておくれ。」

この子をどこまでも助けようとする母の一念に、さすが張りつめた兄の心もゆるんでしまった。

聞多の友人、※どころいくなろう所郁太郎が、その場へかけつけた。かれは、蘭方医であつた。…」

幕府の征長軍に対して、お家第一に考えて無条件降伏しようとする謝罪恭順派を論破して、見かけは恭順を装い内には武力を蓄えようとする武備恭順論を主張した井上聞多は、その夜反対派のだまし討ちにあつて重傷を負いました。

※ 所郁太郎 大坂の適塾で緒方洪庵に蘭方医学を学んだ。

### 一 幕末の長州藩

開国に反対する長州藩は文久三年（一八六三）、幕府の命に従つて五月十日の攘夷決行の日から六月朔日までの間に、関門海峡を航行する米・佛・蘭の艦船を砲撃して攘夷を決行

しました。この過激な行為に対する列強の報復と、元治元年（二八六四）<sup>\*</sup>八・一八のクーデターに抵抗して御所の禁門を守る薩摩藩を攻撃して京の町を焼き、朝廷の怒りをもって幕府の征長軍を迎えるという腹背に大きな問題を抱えていました。

※ 八・二八クーデター 文久三年八月、公武合体派の会津・薩摩藩が朝廷を動かし、激しい攘夷派の長州藩と七卿を御所から追放した政変。

#### 下関砲撃事件の談判

この時、井上聞多と伊藤俊輔<sup>しゅんすけ</sup>らは、『開国して国力を付け、その上で攘夷を實行すべし』とする「大攘夷論」のもとに、先ず欧州の実情を視察せよという藩命で密航していました。イギリスに留学した二人は、目覚ましく発展した工業力と高度の文化・文明のもとに培<sup>つちか</sup>われた彼我の軍事力の差を思い知り、攘夷の不可能を痛感していました。

井上・伊藤は、「タイムズ」紙で、四国連合艦隊が砲撃事件の報復で下関を武力攻撃しようとしていることを知り、急遽イギリスを立ち元治元年六月十日に横浜に帰国します。

井上らは、早速イギリスの公使オールコックと会見して艦隊の攻撃の延期を了承させました。二人は姫島<sup>\*</sup>を経て山口に

帰り、戦いを避けるように藩庁を説得しましたが、攘夷急進派に阻<sup>は</sup>まれて徒労に終わりました。

いよいよ大艦隊が横浜を出航したという知らせが届くと藩論は動揺しました。藩庁はドタン場にきて攻撃を避けようと再び井上、伊藤を交渉に派遣しますが、時すでにおそく、元治元年八月五・六日、下関は連合艦隊十七隻のすざましい砲撃にさらされて為<sup>な</sup>す術もなく大損害を受けて惨敗しました。

戦後、使節の高杉晋作と井上聞多、伊藤俊輔らは通訳として艦隊司令官パークス提督と講和談判を行い、下関に外国艦船の寄港を認めましたが、三百万ドルの賠償金は幕府に転嫁して長州藩の危機を救いました。

前年の文久三年に惨敗した薩英戦争と同じく、列強の艦隊と交戦をも辞さぬとする攘夷急進の「小攘夷」は無謀であることが証明されましたが、長州藩では聞多ら三人は努力にも拘わらず、講和の条件に納得しない攘夷過激派との不満と反発を買いました。

※ 姫島 杵築藩領の姫島、井上らは庄屋古庄席次に介されて「萬屋」藤本新助の船で周防灘を渡り帰藩した。なお、明治二年、藩庁から追われた大楽源太郎が三ヶ月潜伏して回天軍を起こす案を練った。またこの島には外国艦船の石炭貯蔵庫があった。

## 正義派と俗論派の争い

もともと、聞多は、嘉永四年十六才で藩校明倫館に入門、六年に藩侯の供ともで出府して、文久二年（一八六二）、高杉晋作や伊藤俊輔らと品川御殿山のイギリス公使館を焼き討ちするなど過激な攘夷派でした。

元治元年七月に長州藩が起こした禁門（蛤御門）の変の懲罰として、同年八月、幕府は全国の大名に征長軍への参加を呼びかけ、第一次長州征伐の令を発しました。

長州藩は同年八月五・六日に四国連合艦隊の砲撃の大惨事を受けたうえに、長州征伐が現実の問題となると、長州藩の藩論は激しく動揺しました。

長州征伐を恐れ只管ひたすらに謝罪して藩の保全を図ろうとする純一（謝罪）恭順説の「俗論派」と幕府と一戦をも辞さない武備恭順説の「正義派」に分かれて激しく対立しました。

いよいよ幕府の侵攻が迫った九月二十五日から二十六日にかけて、山口城下の政事堂の御前会議で両論が紛糾しましたが、正義派の井上聞多の説得が功を奏し、藩主の毛利敬親も武備恭順に傾きました。聞多が刺客に襲われのは、二六日の夜八時頃、政事堂からの帰路袖解橋そでとぎはしで闇討ちに遭い全身十三ヶ所の傷を五十数針も縫う瀕死の重傷を負いました。

結局、藩論を制した俗論派は、幕府に恭順の意を表して禁門の変の責任者三家老の首と藩主父子の伏罪状を提出して戦火を避けようとなりました。奇兵隊は解散させられて正義派の活動は封じられようとなりました。

井上聞多の遭難で身に危険を感じた伊藤俊輔は藩内に潜伏し、高杉晋作は十一月初め、馬関（下関）を脱出して博多の野村望東尼の平尾山荘に潜伏しました。聞多が別府村の旅籠若彦に潜伏したのはこの前後です。

いったん身を隠した高杉晋作は、家老の処刑に憤慨して十二月初め死を決して下関に帰り、長府の功山寺で力士隊をひきいた伊藤と共に挙兵します。次々と瀬戸内沿岸地方の郷士・豪農・農民の支援を受けて、十二月一六日、藩の下関新地役所を襲撃し占領して反攻に転じました。

正義派と俗論派の内戦は、元治二年（慶応元年）の初め一ヶ月あまりで、正義派の圧倒的な勝利に終わりました。

## 二 井上聞多の別府潜伏

井上聞多の別府潜伏について、信頼の置ける史料（記録・古文書）が手元にないので『世外井上侯傳』侯の別府若松屋滞在（以後世外傳）阪谷芳郎、『別府潜伏時代及其前後の

井上侯』編集発行別府市役所、小説『風塵「聞多と灘亀」池宮彰一郎を参照にしてながめてみましょう。

### 別府潜伏の時期

聞多が襲われたのは元治元年九月二六日、それ以降俗論派が藩政を牛耳って正義派を弾圧します。高杉晋作は、傷を受けた聞多の脱出を見届けて十一月初旬に脱出した筈です。実際、疵ついた聞多が馬関を脱出できるには、癒着を一ヶ月と見て元治元年十月中旬以降十一月初めか、遅くとも晋作とほぼ同時期と見るべきだと思います。※文久四年二月から元治元年聞多の別府潜伏について前記資料によると、「四月（世外傳）」と「慶応元年二月上旬（聞多と灘亀）」の二説があります。しかし、あらためて考えてみると双方共少しおかしい気がします。「四月」は英国からの帰国途中で船中であり、「慶応元年二月」は後述のように遅すぎます。

高杉晋作は三家老の死罪に憤激して、元治元年十二月博多から勇躍下関に帰還し、奇兵隊を再編成して挙兵しました。同月一六日には下関新開地役所を占拠、正義派の勢力が盛り返した時期に聞多が亡命するなど考えられません。むしろ、元治二年二月には帰郷して、鴻城軍の総督となっています。別府潜伏の期間は二ヶ月足らずだったようです。

### 彦七と灘亀

聞多は「紺の褪せた腹掛けと継ぎの当たった股引、それに半纏一枚（聞多と灘亀）」で人足の元締といった扮装をして春山花助を名乗り、馴染の芸者「お静」を伴い五十両懐にしていたといわれます。宿は、部屋から魚釣りが出来る、港（楠港）近くの若松屋（「若彦」という旅籠でした）。

当時、別府村は幕府領島原藩預所（天領）で、遠く離れた島原から派遣された代官が大分郡の高松役所から統治していました。したがって隣接する私藩の干渉を受けない特別な地域で、咸宜園で学んだ者も多く、尊皇思想をもつ者も少なくありませんでした。

『世外井上侯傳』では、主人彦七が、「下関の人」と聞いて「当今長州人に対しては、地方役人の探索が頗る厳密であるから、何時如何なる事件が起こらんとも予想できぬ」といったとあります。彦七は聞多が長州藩の高級武士であることを見抜けないような凡庸な人間ではありません。これは聞多を意識して匿う決意をそれとなく述べたのでしょう。

井上馨（聞多）が明治四十四年再来した折りに、潜伏当時はまだ少女だった彦七の娘佐藤ハツが、「父にあの人は長州の偉い人だから失礼のないように」いわれたと語ったことで

もうかがえます。潜伏の紹介があつたのかもしれない。

「…当地の博徒の親分の灘亀と呼ぶ者に身を寄せたならば、必ずその庇護を請けるのみならず、他日 職業を得る便ともなろうと勧めた。侯はその厚意を謝し紹介を請うたので、彦七は侯を誘つて親分灘亀の家に至り、子分の列に加えられることを依頼した。灘亀は直ちにこれを快諾し、即日親分子分の契を結び、遂にその家に入居することになった。」と聞多が自ら「世外傳」に述べています。

彦七は、聞多を無頼の徒の中に置くことが人目につかない隠れ場になると思つたのでしよう。

温泉地の別府や浜脇村は湯治場はもとより遊興の地で、江戸時代の終わり頃は年間延べ十万人の湯治客（豊後御預所一巻）があり、かなり賑わっていました。そのほとんどが別府、浜脇の港を利用していました。

別府村は嘉永二年、楠港に十五間の波戸を築き、流川の川口を浚渫して船かかりもよくなりましたが、大型船は沖に停泊し沖仲仕が舢で人や荷物を海上輸送していました。灘亀は沖仲仕や波止場整備の人足を束ねる親方だったのでしよう。彼は長洲を追放されたならず者でしたが、彦七は聞多を安心して預けることの出来る人物と睨んでいたのでしょうか。

灘亀こと永井亀吉は明治三十五年、六十七歳で亡くなりました。

灘亀の晩年は両目を患い歩くことも困難だったそうです。私の祖母が娘の頃、浜脇の西温泉の脇で立ち小便をしている老人を見て嫌な顔をしたら、連れの友人から「あれは灘亀だから」と注意されたと話していました。晩年は「天罰が下つた」と相手にする者もなく苦境に陥りました。同郷の誼で永井平吉夫婦が面倒を見ていましたが、最期は行き倒れ同様の死だったといわれます。

#### 若彦（若松屋）

聞多が訪れた旅籠「若彦」は、流川通りに面した海門寺道（銀座裏通）の山手側にありました。聞多は離れ二階の座敷に逗留しました。これは庶民以上の待遇でした。

銀座裏通は今もくねくねと曲がっています。江戸時代からある古い道だからです。

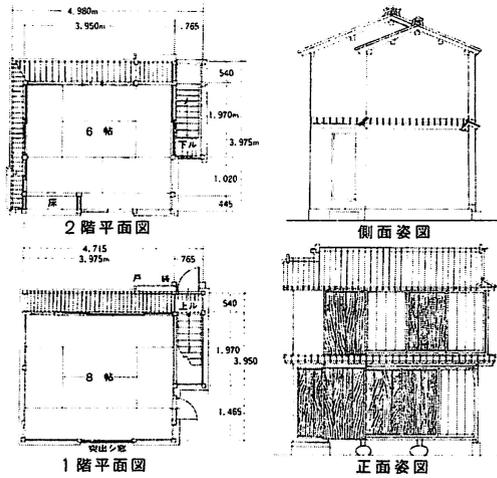
井上侯が再訪したときに、二階の東側の窓をあけて「海が見えないのだが？」といったそうです。



四七年の間に周囲が随分変わっていたのでしよう。

松尾彦七も聞多が別府を去ってから明治十二年に亡くなり  
ました。

昭和八年に楠本町から駅前通りに貫く今の銀座街を通す  
きに、銀座街の流川入り口を塞ぐ若松屋を取り壊すことにな  
りました。



もとの旅籠

「若彦屋」は三代目亀四郎が改築して大きくなり「若松屋」と屋号が替わりましたが、聞多が潜伏した離二階屋敷はそのま  
ま残りました。

(今日新聞)

「離れ二階屋」は歴史的遺産として別府市に寄贈され、現在市指定史跡「千辛万苦之場」として保存されています。貴重な江戸時代の町屋の建物です。

### 三 別府の井上聞多

正確な記録がないので伝記の中から幾つか紹介します。

『世外井上侯傳』に次のようにあります。

「…ある日、同地の楠湯に入浴してゐた所、一人の士人が妻と娘を伴うて浴場に来たり。侯が身体に数カ所の刀痕があるのを見つけ、その事由を問いかけた。…『若年の無分別から、姦通の非行をしたため、かく負傷したのである。』と偽り伝えた。すると彼はその生国を問うたので、『下関の者で、土方人足である。』答へた。士人はまた先般下関に於ける攘夷の戦況を問うたので、侯は答えて『私は当時台場を築き大砲を運搬する等の労役に雇われ居り、戦争中は軍夫と偽って弾薬や糧食を輸送してゐた。』と告げた。件の士人は興あることに思ひ、なお戦況の詳細を尋ね問ふので、侯は虚実を交えて面白可笑しく戦況を談じ、はてはその士人の請けに任せてその旅宿に至り戦争談を継続した。彼は益々侯の快活なのを歎び、『明朝は鉄輪に転浴しようと思ふから、支障なくば随行してくれぬか。』と懇望したので、侯は喜んでこれを諾し、約の如く翌朝その旅宿に行つた。ところが士人は両掛荷を持ち出し、侯にこれを担はせようとしたので、侯は大いに驚いたが、既に土方

人足と称した上はこれを拒むに由なく、やむを得ずその両掛を肩にし、一里半ばかりの山路を辿って鉄輪まで随行した。その両掛の重量はおよそ四・五貫目もあつて、これがため侯の肩は腫れ上がり、非常の苦痛を感じたといふことである。同地に滞在すること三・四日で暇を請ひ、額銀一朱の謝礼を受けて別府に帰った。」

件の武士との話が侯の伝聞としても、それは面白可笑しく語った侯の作り話でしょう。

詮索するのも大人気ありませんが、文久二年高杉晋作や久坂玄瑞らとイギリス公使館を焼き打ちした壮士で、のちにイギリス留学、下関事件では公使オールコックやパークス提督と講和談判をし、俗論派を論破した代表的な長州武士を士分の者が間違うはずはないと思います。

「…博徒の常として子分等は、職業の暇があれば樗蒲（養子博打）を弄して輸贏（勝ち負け）を争うのが常であつた。侯もまた勢いその列に加わらなければならなかつたので、懐中の五十両は二三日の間に皆これを輸し（負け）尽くした。」

「世外傳」にはお静の記述がありませんが、芸妓お静を下関へ金策に遣わして、金子や伊藤俊輔（博文）の情報をもち

て来たとの伝聞もあります。

井上聞多が別府を去つたのは何時いつでしょう。詳しい記録が残っていませんので、推理する外ありません。

元治元年十二月初め、高杉晋作は三家老の切腹に憤慨して急遽平尾山荘から帰還して同士を糾合し功山寺で決起しました。同月十六日、下関新開地役所を占拠して俗論派の一角を崩し正義派が攻勢に転じました。

聞多らが主張した武備恭順論が藩論になり、藩主が山口に移ると、高杉や伊藤は盟友井上の帰藩を促したに違いありません。

一方幕府の第二次征長軍の動きも盛んになったのですから、帰藩は急がれていた筈です。おそくとも元治二年正月\*か二月初旬には別府を發つたのではないかと思います。

聞多の別府潜伏は、恐らく三ヶ月位だったのでしよう。

「世外傳」には、「ある日下関から急使があつて伊藤俊輔の書簡をもたらしした。その書中には、桂小五郎帰藩の事を報じ、且つ侯の帰藩を促す旨が認められてあつた。」とあります。

或る説には「…小郡の桜井慎平らは農兵を率いてまた山口に出た。吉富藤兵衛、杉山孝太郎、長松大助らもまた農町兵を編成してこれに合し、町奉行所や代官所を襲い常栄寺に拠

り、その頃親類預となっていた井上馨を奪い出して総督とし  
鴻城軍と名づけた。この一隊は一七日(元治元年二月)の朝、  
佐々並を襲うて俗論党の兵を打ち払った。」(幕末通史)明治  
維新と山口)とありますが、別府潜伏は井上自身が認めてい  
るのですから史実です。

松尾彦七は聞多が別府を去って約一五年後、明治十二年に  
亡くなりました。旅籠「若彦屋」は三代亀四郎が改築して大  
きくなり「若松屋」と屋号が替わりました。聞多が潜伏した  
離屋敷はそのまま残りました。

※ 元治二年 元治二年四月七日に慶応に改元される。

#### 四 千辛万苦の場

明治四年五月二九日、井上馨は別府を再訪しました。

別府来訪の糸口を開いたのは伊藤博文だったようです。明  
治三年、伊藤が九州遊説に出かける際に、井上が「別府へ  
行くことがあれば、昔俺が潜伏していた時のことを分かるだ  
け調べてくれ」と頼みました。伊藤は別府の麻生太吉の別荘  
「五六庵」(現中央公民館)に泊まって調べさせた結果「旅館  
はまだ現存している」ことが分かり、帰京して井上に伝え、  
別府行きを勧めましたが、都合がつかずその俵になっていま

した。

井上が別府を訪れたのには、次のようなわけがあったよう  
です。

高杉晋作(東行)の配下だった井上馨・伊藤博文・山縣有  
朋は、「奇兵隊発祥の地に遺体を葬るように」の晋作の遺言  
にしたがって、下関市吉田に墓と東行庵を建てました、以後、  
晋作愛人「おうの(谷梅処)」が庵主になって菩提を弔って  
きました。四二年に二代目庵主を梅仙に託して他界しまし  
た。明治四年五月二十日、井上が西下したのは、梅処が心  
待ちにしていた大頭彰碑が清水山に建てられ、その除幕式に  
出席するため、井上は除幕式で祝辞を述べ晋作の業績を称  
える演説をしました。

除幕式が終わって井上は別府を訪れるために、三池の貝島  
太助に「若彦屋」の調査を命じ、貝島は高山篤太郎という人  
を別府に遣りました。高山は町長や助役に尋ねましたが「若  
彦屋」が見あたりませんでした。幸い町会議員の和田彦蔵  
氏が松尾彦七との縁類であることが分かり、松尾亀四郎の「若  
亀」がかつての「若彦」であることを突き止めました。

井上は五月二九日、日出まで開通したばかりの豊州鉄道で  
日出から路線工事前の特別仕立列車で午後三時新別府駅に着

き、「五六庵」に入り、千葉大分県知事、吉田別府町長、日  
名子助役の挨拶を受けました。



中央は井上 左が彦七の次女佐藤ハツ

右が長女で、右二人目が当主で

彦七の孫亀四郎



早速、井上は「五六庵」で若彦屋彦七の遺族に対面し、「彦  
七や灘亀が生きていれば」と残念がったといひます。

井上の潜伏から四七年たつて、井上を覚えてゐる者は潜伏  
当時一二歳であつた次女の佐藤ハツのみでした。ハツが「あ  
の時、女性の方がご一緒で、たしかお静という方でした。」  
といひ、そのことを知らない周りの人は驚いて井上に目をや  
ると、井上は笑みを浮かべ「今日あつて明日の命の知れぬ時、  
そう言うこともあつただらう」といわれたそうです。ハツは、  
聞多が持つていた舶来品のケット（毛布）のことなど、少女  
らしい思い出ばなしをしたそうです。

また、ハツが「よく奇兵隊」といふ言葉を聞いていたが騎兵  
隊と思つていた」といつたら、井上が声を立てて笑つたとか。  
先にあげた「長州の偉い人」の話はこの時に交わされたんで  
しよう。当時の「奇兵隊」といふ言葉が印象深く少女の耳に  
も残つていたのでしよう。

翌三十日、懐かしい「若亀」に赴き、離れ二階の六畳間で  
記念写真を撮り「千辛万苦之場」の扁額を揮毫しました。

また井上は、三十一日夜「別府は恩誼ある地だから、自分が  
招いて昔日の誼に報いたい」と町側の歓迎会を辞退して、知  
事始め地元の名士を招き、不老泉三階の大広間で酒宴を張つ

たということ。灘亀の面倒をみた永井平吉は漁に出ていて妻が亀吉の位牌をもって出席しました。

井上は灘亀の消息をくわしく尋ね、「土地の人に嫌われても私にとっては恩人である」と云って、永井平吉に金一封を贈り、後日浜脇の芝生墓地に墓石を建てて供養しました。



法名 釈退来 行年六十七歳  
俗名 永井亀吉  
懐旧 井上馨建之

後日談ですが、井上は別府滞在中、知事らをつかって宇佐郡北馬城村岩崎出身で、東行庵二代目庵主「梅仙」の身上調査をしたようです。

井上が別府からの帰途、梅仙を下関の大吉楼に呼び出して、「お前の身元を調べたが、結構じゃから早速入籍（谷家）の手続きを取った」と告げたそうです。晋作が起こした谷家の相続は晋作に恩顧を受けた井上にとって最大の関心事でした。

井上が下関に向かったのは晋作の大頭彰碑の除幕式に出席するためでしたが、別府まで足を延ばした訳は、梅仙の身上調査の序だついでだったと云う説がありますが、井上は激動の幕末にあつて一時潜伏した「若彦」への懐旧の念にかられて、わざわざ「千辛万苦の場」を訪れたものと思いたいものです。

#### あとがき

子供の頃、公民館の裏手に保存されていた若松屋の離屋敷はなれやしきをよく見に行つたものです。市の文化財調査員になって、井上馨が潜伏した離屋敷を市の指定史跡に指定し、その修復移転に携ろうとは夢にも思っていませんでした。

土蔵造りの一階八畳一間・二階は六畳一間の二階建ての木造建築で、各階ともに南側に縁が儲けられ二階の縁には手摺が設けられています。旧建物は白蟻の被害が著しく、昭和五七年に旧材はできるだけ利用して現在の場所に移築しました。

完